

2017年5月28日川越教会

「不良」の救い

丸山 勉

【聖書】 ローマの信徒への手紙 11章 25～33節

兄弟たち、自分を賢い者とうぬぼれないように、次のような秘められた計画をぜひ知ってもらいたい。すなわち、一部のイスラエル人がかたくなになったのは、異邦人全体が救いに達するまでであり、こうして全イスラエルが救われるということです。次のように書いてあるとおりです。「救う方がシオンから来て、ヤコブから不信心を遠ざける。これこそ、わたしが、彼らの罪を取り除くときに、彼らと結ぶわたしの契約である。」福音について言えば、イスラエル人は、あなたがたのために神に敵対していますが、神の選びについて言えば、先祖たちのお陰で神に愛されています。神の賜物と招きとは取り消されないものなのです。あなたがたは、かつては神に不従順でしたが、今は彼らの不従順によって憐れみを受けています。それと同じように、彼らも、今はあなたがたが受けた憐れみによって不従順になっていますが、それは、彼ら自身も今憐れみを受けるためなのです。神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだったのです。ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。

【序】

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる。」(マタイ 18:20)。今ここに、私たちの交わりの真ん中に復活の主がおられます。その主からの語りかけを一緒に聴きたいと思います。

今日の『聖書教育』で取り上げられている箇所は11章の途中の部分でしたが、その前後、9章のはじめから11章の終わりまでは一つのまとまりになっていますが、そこでパウロが伝えたかったことは一体何でしょうか？ パウロは、異邦人にも主イエスの福音を宣べ伝えるために神様から召された使徒でした。このロマ書の11章13節でもパウロ自身こう言っています。「わたしは異邦人のための使徒であるので、自分の務めを光栄に思っています」。けれども、ご存じのようにパウロ自身ユダヤ人でした。自らを「ヘブライ人の中のヘブライ人だ」と言うほど、旧約聖書に示された神様の契約の民である誇りは誰にも負けなかった人物です。ロマ書9章から11章は、パウロの心の奥底にあったジレンマと言いますか、異邦人すなわちユダヤ人以外の世界の人々に向けて喜んで福音を伝える一方、では、旧約聖書以来のユダヤ人に対しての神様の約束は取り消されてしまったのだろうか？ 私の同胞はどうなってしまふのだろうか？ という、切実な問い—これは救いに関する問いですね—が語られている、とても重要な部分であると思います。つまり、この問いは、キリスト教の救いというものが、限定された民族の救いであるのか、そうではなく、世界全体、<すべての人>に対しての救いであるのかという問いであるからです。

【1】伝道者パウロの心

パウロの、同胞への愛は強いものでした。9:2～3でパウロはこのように言っています。「わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています」。これはすごい言葉ですね。そして10:1ではこう語っています。「兄弟たち、わたしは彼らが救

われることを心から願い、彼らのために神に祈っています」。—そうですね、「救い」の問題というのは、涼しい顔をして語ることは出来ないものです。パウロは文字通り、自分自身のこととして、神様と対決するかのようにして、この問題に解決を祈り求めたのだと思います。パウロは優れた神学者であったと言えるわけですが、それ以上に熱い心を持った＜伝道者＞である、と言えると思います。

『ロマ書』(ローマの信徒への手紙)全体のテーマをひと言で言うことが出来るとすれば何でしょう。私はFEBCに勤務していて、優れた牧師先生たちの説教を多数聞く機会に恵まれてきました。ずっとFEBCに出演下さっていた加藤常昭牧師もこのロマ書の講解をして下さいましたけれども(今再放送をしています)、他に私がとても印象的だったのは、日本基督教団・京都西田町教会で牧師をされていた杉田太一先生が(既に召されてしまいましたけれども)、このロマ書の講解説教を教会でずっとされ、そのカセットテープを私が聞いて編集をする、という仕事をしていたことがあります。とても恵みを受けました。二年位の長いシリーズになりました。その時杉田先生がこのロマ書のシリーズ全体に付けた番組名は『信仰のみ』というものでした。このロマ書を貫くテーマは「信仰のみ」だと。

私たちは「信仰のみ」という言葉を聞くと、ともすると排他的な印象を持ってしまいます。信仰の強さが大事なんだ、と思ってしまいます。お百度参りなんていうのがあるように、私たちの願掛けの強さ、真剣さが問われてしまう様に思うんです。これは批判しているのではありません。いえ、もしかしたらキリスト教もそんなことを強調して、祈りが聞かれないことを、信仰心が足りないからだ、自分や他人を裁いてしまうことになりかねません。「信仰のみ」というのは、そうではないのです。それを見てみたいと思います。

[2]神様の義とは

10:2をご覧ください。こうあります。「わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを証しますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです」。ユダヤ人は熱心な信仰心を持っている、それは認めるが、けれどもそれで救いに与えられるのではない、と言うのです。これは私たちが普通に抱いている「信仰」とか「宗教」などのイメージと違います。私たちの神を求める熱心さ、それがどこまでも「自分」が主体になっているとすれば、それは「神の義」とは相反するものなのだと言うのですね。「あなたがたは神の義を知らないのだ、とパウロは言います。ここで大切なのは、では神の義とは何かということです。色々な言い方が出来ると思いますけれども、神の義とは、神様が用意された救い、すなわち、神様と私たちの「つながり」のこと、伸ばされた神様の手を握り返すことです。神様との生きた「関係」です。これは、人間の頑張りではありません。いや、実はもう神様が人間をお造りになられた時から、原初からあった関係なんです。神様は人間に対しては、命の息を「ふーっ！」っと息を吹き込まれて創造して下さいました。他の被造物は違います。言葉だけで作られました。けれども、人間はそんなにも近く、また神ご自身の命が注がれてこの世へと送り出された、比類のない存在なんです。しかしその人間は、自分でその神様との関係を切ってしまった、と聖書は記しています。それが私たち人間の根本的な「罪」です。しかしそれに気が付かない。罪人である、ということが分らない。じゃあ、神様はそんな迷子のようにってしまった人間を放っておかれたんですか？—一面からすればそうです。ロマ書の中にも1章で何度か出てきますが、罪ある私たち人間に対し「神はなすがままに任せられた」(口語訳)というような言葉が出てきます。考えたら恐ろしい言葉だと思います。神様は一面そのように人間を裁くお方でもあります。しかし、それだけで終わりませんでした。神は

その独り子を私たちのためにお与えになりました(ヨハネ 3:16)。神様がどこまでもあなたを愛してやまないのだ、ということを知らせるために、ただ言葉ではなくて、ご自身の痛みを通してこの歴史の出来事としてイエス様を送って下さったのです!これは実は、旧約聖書が目指していたことでした。10:4にある通りです。「キリストは、律法の目標であります、信じる者すべてに義をもたらすために。〈信じる者すべて〉に。これがキリスト教です。

[3]ユダヤ人と異邦人

さてしかし、そのキリストを、こともあろうに当時のユダヤ人たちは神を冒瀆する者として拒み、十字架に追いやってしまいました。しかも当時のユダヤ人はこぞって「この血の責任は、我々と子孫にある」(マタイ 27:25)とさえ言うてしまったのですね。パウロの心が痛んだのも当然だと思います。自分もユダヤ人、もう神様はユダヤ人に愛想を尽かして、切り捨てられても申し開きは出来ないではないか…。

しかし、そこで大逆転劇が起こっていることをパウロは発見し、告げているのです。それが 11 章です。1 節で「では、尋ねよう。神は御自分の民を退けられたのであろうか。決してそうではない。」と語り、ユダヤ人はキリストにつまずいた訳ですけれども、11 節では「彼らの罪によって異邦人に救いをもたらされる結果になりました」とあります。神様はすごい!と思いませんか? 信頼していたユダヤの民に反逆をされた神様でしたが、私の用意した救いを受け取らないのなら、嫌気がさして、もうこの世界はダメだと徹底的に裁いてしまっても不思議ではないと思いますけれども、神様は、その救いを受け取ってくれる存在があるのなら、この救いはその人のための救いとなるのだ!と、結果として、この救い、福音は、世界に広げられることになったわけです。今信じている日本の私たちも、その恵みが流れ来て今日あるを得ているのです。

この 11 節とまた 14 節には面白い言葉が出てきます。「ねたみを起こさせ」という言葉です。ユダヤ人が異邦人が救われる様を見て「ねたむ」ということです。前の口語訳では「奮起して」となっていました。これも面白い神様のなさり方だなと思います。私はここを読んであの「放蕩息子の譬え話」を思い出しました。ルカ福音書 15 章です。一人の父親に二人の息子がいましたよね。その弟息子が、もうこんな所にいたくないと、自分勝手に親の遺産をも受けてしまって遠い所に行き、遊びほうけた挙句に財産も失い食べる物にも事欠くことになると、我に返って「ああ、俺は馬鹿だった。父の所には有り余るほどのパンもある。もう息子と呼ばれる資格はないことは分かっている。でも死ぬよりましだ。俺は父にも天に対しても罪を犯した不良息子だ、こんな者を迎えてくれるか分からないが、とにかく父親の所に帰ろう」と、恐らく足を引きずるようにして帰ってきた。そうしたらビックリした。父親の方がこの不良息子を遠くから認めて、走り寄って何も言わずに首を抱いて接吻したと言うのです。感動的な話です。この息子は雇い人のしてもらえたらと思っていたのですが、それどころではありませんでした。父親は豪勢な祝宴をこの息子のために開き、最上の着物と指輪をさえはめてやったと言うのです。しかし、この祝宴にそっぽを向いて参加しなかった者がいましたよね。この弟の兄です。

この兄は父親に言うのです。「あなたのやり方はおかしい。私はずっと真面目にあなたのもとで仕えてきたのに、これまで遊ぶために子ヤギ一匹だってくれなかった。なのにあの不良息子が帰ってきただけで、何であんなに喜ぶんですか?」と。この時、この兄は弟を妬んだんです。でも妬みというのは、自分の中に閉じこもる方向に行ってしまうがちです。その兄に父は言いました。兄を叱りません。「子よ」と呼びかけて、「お前は私といつも一緒にいる。私のものは全部お前のものだ」よ、と。

そしてその後続く言葉が重要です。「(お前の言い分もわかる)。だが、あの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて喜び祝うのは当たり前ではないか」と。父親は、私の心を知って欲しいのだ、お前もあの弟も、同じように私の子なんだ、二人とも私は失いたくないのだ！…それを聞いたら、この兄の心は変わるでしょう。変わらざるを得ない。そして、何と自分は自己中心だったのか、父の心が分らないダメな息子はむしろ自分の方ではなかったかと思ったのではないのでしょうか。そして「妬み」というより、「奮起」して、これからはこの父の心になかった生き方をしよう、喜ぶ者と共に喜ぶ生き方、泣く者と共に泣く生き方へと変えられていったのではないのでしょうか？ 二人の息子とも、間違いなくこの父の息子です。この二人の息子、まるでこのロマ書の異邦人とユダヤ人みたいだなと思いました。

ロマ書 11:30 以下をお読みします。「あなたがたは、かつては神に不従順でしたが、今は彼らの不従順によって憐れみを受けています。それと同じように、彼らも、今はあなたがたが受けた憐れみによって不従順になっていますが、それは、彼ら自身も今憐れみを受けるためなのです。神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだったのです。ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか」。一神様のなさり方は本当に不思議です。そして、愛に、憐れみに満ち満ちていると思います。

[4] イエス・キリストによって

さて初めに、「信仰のみ」と言うようなことを申しました。この「信仰」というのは、先ほどの放蕩息子の話とも重なりますが、私たちの真面目さ、熱心さのことではないのです。むしろ逆です。私たちは表面的に真面目であろうが、破天荒であろうが、神様の前には不良少年、不良少女なのです。けれども、と言いますか、だからこそ、と言ってもいいかもしれませんが、神様は私たち一人ひとりを可愛がってくれる、愛して下さっているのです！ あなたを失いたくない。あなたも私の命の息を吹き入れた神の子なのだから。そしてその愛の決定的なしるしとして御子イエスを私たちに送って下さいました。11:26 の言葉は、招きの言葉として読んで頂いたイザヤ書 59 章からの引用です。パウロは「救う方がシオンから来て、ヤコブの不信仰を遠ざける」と記しました。救う方とは、イエス・キリストです。私たちはこのお方を受け入れればいい。神様がイエス・キリストによって、私たちを見捨てず手を差し伸べて下さっているのです。これが、神様の義、神様の信仰、神様の真実です。不信仰を遠ざける信仰が、神様からやってきた、というのですね。「(この) 主の名を呼ぶ者はだれでも救われます」(10:13)。私たちに求められているのは、この「信仰のみ」です。

[5] 結び—変わることはない契約

私たちに対しての神様の憐れみの契約は変わることがありません。11:29 節に「神の賜物と招きとは取り消されないものなのです」(口語訳では「神の賜物と召しとは、変えられることがない」とある通りです。ここには私たちの想像を超えた「赦し」があります。不義に陥ったイスラエルも安心しなさい、一度選んだあなたがたを神様はこれからも責任を持って担って下さる！と。それと同じことが今や異邦人であるあなたがたすべての者についても言えるのです、と聖書は語ってくれています。私たちは一度は切りとられた存在、いえ、自分からその関係を切ってしまった存在なのですけれども、神様によって、私たち枝は、その幹に、根っこに接ぎ木して頂いた存在なのです。まことの神を知らずに、神に背を向けて歩んでいた私たちをも、神様は大いなる愛を持って、契約の民の一員にして下さいました。そうです、本当に私たちを裁くことがお出来になる力を持つ方だけが、本当に救いを

与えて下さることが出来るのです。ロマ書の初めにもあったではないですか！「福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、**信じる者すべてに救いをもたらす神の力**だからです。」(1:16)。神様の目にはなんら差別はありませんし、そして、その神様に握られているその御手の強さをこそ、私たちは信じたいと思います。

最後に一つのエピソードをお話して終わります。

若き日の内村鑑三が体験したエピソードです。25才の時だそうです。内村は、自分の心の奥底にある罪の問題に苦しんでいました。そこで内村はある日、留学先であるアメリカのアマスト大学のシーリー総長に、その平安がない自分の内面の葛藤について相談しました。シーリー総長は、内村にこう言ったそうです。「あなたは自分の内側ばかりを見ているからいけないのです。内側ばかりを見ることを止めて、十字架の上であなたの罪を贖われた主イエスをなぜ仰ぎ見ないのですか。あなたがしていることは、子供が木を植木鉢に植えて、その成長を確かめようとして、毎日その根を引き抜いて見るのと同じです。なぜ、これを神様と日光に委ねて安心してあなたの成長を待たないのですか」。その後、内村はその時から自分が変わった、いえ、変えられたことをこのように記しています。「第二回目の回心は(第一回目というのは、さらに若き日の最初の主との出会いの時ですけれども)、私がキリストの十字架において自分の罪の贖いを認めた時でした。その時、私の心の煩悶はやみました。いかにして神の前に正しくあることができるか、と悶え苦しんでいた私は、「仰ぎ見よ、ただ**信ぜよ**」と教えられて、心の重荷がたちまち落ち、心軽き人となったのです。私は道徳家であることをやめて、**信仰家**となりました。私は私の義を、自分の心に見るのではなく、十字架上のキリストにおいて見ました。アマスト大学の寄宿舎において」。

— 私たちに求められているのは、この信仰のみ、ではないでしょうか。

感謝と感動、悔い改めを持って、この「信仰」というギフトを受け取りたいと思います。

お祈り致します。

「主の御名を呼び求める者はすべて救われます」。神様、感謝致します。今、あなたの名を呼びます。救って下さい。いや、既に私たちは独り子イエス・キリストの十字架によって、また復活によって救いの中へと招かれているものであることを教えて下さり感謝致します。しかし、私たちの心の目が曇っているので、それをしっかりと見る事が出来ません。しかし、あなたは何度でも何度でも御言葉を通してその救いの事実を示して下さい。聖霊によって私たちの霊の眼(まなこ)を開いて下さい。この救いこそ、神ご自身が用意して下さい、全ての人に注がれている、ただ一つの希望です、慰めです。どうぞ、あの放蕩息子のように、恥もプライドも捨てて、ただ身軽になってあなたのもとに立ち帰らせて下さい。

この世界が崩れかけているように見えて仕方がありません。主よ、どうぞ憐れんで下さい。心から執り成し祈る者とさせて下さい。あなたを知る愛が、この世界に満ちていくことが出来ますように…。

私たちの救い主イエス・キリストによってお祈り致します。

アーメン。